

デヴィッド・ハーヴェイの地理学

竹内啓一

最近バターソンによって本稿と同じタイトルの書物が
発表された。教えられるところの多い研究であるが、ハ
ーヴェイの主要な著書を、

Explanation in Geography, Arnold 1969, 521 p. (以
下E・Gと略記する。なお、松本正美訳『地理学基礎論』
古今書院 一九七八年 は本書の前半部分に相当する。)

Social Justice and the City, Arnold, 1973, 336 p.
(以下S・J・Cと略記する。なお、竹内啓一、松本正美
訳『都市と社会的不平等』 日本ブリタニカ 一九八〇
年 は本書の全訳である。)

The Limits to Capital, Basil Blackwell 1982, 478 p.

(以下L・Cと略記する。)

の三つとみなすと、バターソンの研究は、それがなされ
た時期の制約から、その本文中ではL・Cのハーヴェイ
への言及はない。S・J・Cの訳者としてその解題を書
いた者として、また以前にハーヴェイを初めとする「ラ
ディカル地理学」についての展望論文を書いた者として、
そしてバターソンの研究から多くの示唆を得つつもそれ
に対する問題をいくつか感ずる者として、この機会に
筆者なりに、L・Cに至るまでのハーヴェイの地理学に
対する分析を試みることにしたい。

現存の、しかも五十歳に満たない(彼は一九三五年生
れである)研究者の地理学が、研究の対象になり、一冊
の書物まで出版されるのは、たしかに異例な事である。

しかし、「新しい理論地理学のパイプル」⁽³⁾とさえ呼ばれたE・Gと、そこから一見大きな転向を遂げて、マルクス主義の立場からアメリカの都市問題を分析するに至ったS・J・Cおよびその他の論文によって、ハーヴェイは、一九八〇年には、その文献が引用されることの最も多い地理学者になっていたのであるから、彼の地理学が研究対象として取り上げられるのも当然であると考えられるし、ハーヴェイを論ずることは、学説史的研究や書誌学的あるいは伝記的研究をするのちがって、混乱している現代の地理学における注目すべき一つの創造的な試み、ハーヴェイ一人のそれではなしに、社会的、集団的な一つの潮流を分析するというアクチュアルな意味を持っているのである。同時に、同世代の彼の到達点は、当然のことながら、筆者にとっては対決すべき対象として存在するし、後にのべるように、それは対決するにたる手ごわい相手でもあるのである。

「ケンブリッジの伝統的地理学を教え込まれた(indoctrinated)結果」と後に自ら述べているケント地方の農業についての歴史地理学的研究は、全体としては、たしかに、伝統的な記述的色彩の濃いものであったが、統計

学的手法の利用、 Cholmerley とアイサードへの言及など、後にE・Gに結実する関心が、彼の仕事の出発点からすでにあらわれていたことに注目しなければならない。⁽⁶⁾一九六〇年代のハーヴェイは、主としてブリストルにあって、演繹的手法、またはモデル構築による新しい地理学の理論の創出に沈潜していたのであった。一九六七年に、ハゲットと Cholmerley によって編まれた書物⁽⁷⁾は、その革新的な内容によってのみでなく、それに続く時期に、主としてイギリスの大学における計量地理学の指導者になる研究者を、その執筆者として連ねていたという点でも、画期的なものであったが、ハーヴェイはそこに「人文地理学における空間パターン」と題する注目すべき論文を発表している。ここにおいて、ハーヴェイは、たとえばハーツホーン流に地理学の研究を「地表の性格の変化の記述と説明」⁽⁸⁾としたところで、地域的パターン (areal pattern) の発展の分析が、伝統的地理学においても必要になることを示した後、定式化されえないこれらのパターン分析による理論が、検証されえないという点で、十分であることを指摘した上で、歴史学および地理学の科学的研究において、モデルのはたす役割は、理解の定式

化にあることを主張し、モデル構築こそが地理学のルネッサンスの要である⁽⁵⁾と結論した。ここにおいて、ハーヴェイがかかげたルネッサンスとは、空間科学としての地理学のそれであるが、同時に、この論文の中で、時間・空間モデルが、余りに一般化されたものになるか、あるいはヘーエルストランドの拡散モデル⁽⁶⁾のように、限定された小地域における特殊な条件(この場合について言えば、いわゆるロコミ⁽⁷⁾だけによる情報伝達)の下でしか適用されないものになることを指摘している。E・Gに先行して、ハーヴェイの名を高からしめた論文において、すでに彼が、地理学のルネッサンスを方法論上で語りながらも、それが、現実の説明、すなわち哲学の上でもつ境界に気づいていたことには注目しておく必要がある⁽⁸⁾。

- (1) Paterson, J. L.: *David Harvey's Geography*, Croom Helm, 1984, 220 p
- (2) 竹内啓一「ラディカル地理学運動と『ラディカル地理学』『人文地理』第三十二巻 五号一九八〇年
- (3) Peet, R.: *The Development of Radical Geography in the United States, Progress in Human Geography*, Vol. 1, No. 3, 1977
- (4) *News Letter*, Association of American Geographers

1980

- (5) 彼の博士論文は *Aspects of Agricultural and Rural Change in Kent, 1800-1900* と題して一九六一年ケンブリッジ大学の地理学教室に提出されたが、筆者は未見である。その一部は、*Locational Change in the Kentish Hop Industry and the Analize of Land Use Patterns, Transactions and Papers, Institute of British Geographers*, 33, 1963 として発表された。

- (6) 彼が一九六三年に発表した論文は、後に Baker, A. R. H., J. D. Hanshew and J. Langton (eds), *Geographical Interpretation of Historical Sources: Readings in Historical Geography*, David & Charles 1970. に収録されたが、その Supplementary Note の中でハーヴェイは「そこにおける重力モデルや回帰分析あるいは相関分析の利用は空間的自己相関及び空間スケールの問題を軽視したが故に、誤りであったと自己批判している」。

- (7) Chorley, R. J. and P. Haggett (eds) *Models in Geography*, 316 p. Methuen, 1967 においてこの論文は第十四章 Models of the Evolution of Spatial Patterns in Human Geography として収録された。

- (8) Hartshorn, R. *Perspective on the Nature of Geography*, Association of American Geographers Monograph, 1961 201 p. (山岡英喜訳『地理学の本质』古今書院 一九七五年)

(6) Hægerstrand, T. *Innovationsforloppet un korelisk
synpunkt*, 1953. ヲリムナク, On Monte Carlo Simulation
of Diffusion, *European Journal of Sociology*, VI, 1965 に
よった。

二

このようなE・Gにいたるまでの彼のいわば前史を理
解することによって、われわれはE・Gが、「新しい地
理学のバイブル」である以上の、むしろ、それを越えた
意味を持っていることを発見するのである。まず第一に、
ハーヴェイは、すでにその序文において、地理学におけ
る計量革命は、単なる研究技術における革新以上のもの、
すなわち哲学的革命を意味しており、本書における意図
は、地理学における科学的方法の役割を明らかにするこ
と、数学的、統計学的方法が依拠する哲学のおよび方法
論的仮説を理解することにあることをのべている。本文
を書き終えてから一年近く後に書かれたこのE・Gの序
文におけるように明確には、本文中においては、方法論
と哲学とは区別されていない。むしろ、序文において、
本文を interim report と呼ばざるを得なかったほど、

本文を書いたハーヴェイと、序文における彼との間には、
大きな変化があったのであり、おそらくは、「新しい地
理学」の集大成を意図して書きはじめたであろう本書の
本文の記述の中にも、当初の意図から逸脱して、論理的
実証主義に基づく方法論に対する哲学的批判、あるいは
そのような方法論、または技法の困難や限界に関する指
摘が随所において、潜在的乃至顕示的になされることにな
ったのであろう。

本書の後半部において、彼は、地理学にとって、モデ
ルというランガージュを提供する可能性のあるものとし
て、数学、幾何学、確率論などを吟味するのであるが、
結果的には、まず(1) 因果決定論モデルに関しては、そ
の有効性を認めつつも、因果法則が作用していることを、
ア・プリオリに認めることになる危険を指摘し、(2)
「時間」という要素を、単なる物理的時間以上のものとし
て、地理学における説明に取り入れる可能性について
苦慮した後、地理学本来の空間理論と、時間的プロセス
に関する理論とを結びつける地理学の一般理論を展望し
つつも、特に人文地理学に関しては、その困難を指摘し
ている。心理的又は社会的時間をも考慮に入れようとす

るのであれば、ハーヴェイは、ここにおいて、ユークリッド空間における導関数でそれを説明しようとするような試みそのものを放棄しなければならなかったはずであるが、ハーヴェイはそのような方向に推論を徹底化しなかった。(3) パターソンも指摘していることでもあるが、たとえば人類学におけるラドクリフ・ブラウンの場⁽¹⁰⁾合におけるように、構造主義的機能論は、因果決定論と十九世紀の実証主義とに反対し、物理的機械論に對置されるべき説明原理をもたらずであろうことを、ハーヴェイは認めて、地理学におけるその有効性を承認するのであるが、その具体的適用例は示されておらず、かつまた、その承認も、地理学において「成熟した理論 (mild-down theory) が発達するまで」という条件つきにおいてである。(4) システム理論に関して、ハーヴェイは、伝統的地理学にあった閉鎖システムの考え方を、チョルリー⁽¹¹⁾やベリ⁽¹²⁾が革新したことの意義を認めてはいるが、一般システム理論の枠内でのハーヴェイ自身による地理学の具体的展開がないために、本書のこの部分に関しては、極めて舌足らずな記述に終っている。

E・Gは、たしかに計量革命を経た論理実証主義に

基礎を置いた、新しい地理学の集大成であった。同時に、それに続く二つの主著がそうであったように、本書も又、自己否定的な新しい方向を内にはらんだ interim report だったのである。四年後にまとめられたS・J・Cの序文において彼は、E・Gにおいて幾つかの哲学的諸問題を意図的に (deliberately) 無視したと述べているが、E・G及びその前後のハーヴェイの著作を注意深く読むならば、彼がすでに一連の新しい問題を不用意に、あるいは意図することなしに出してしまっていたことがわかるのである。

ここで指摘した「新しい地理学のバイブル」ととまらないE・Gにみられた諸点に加えて、次に注目しておかなければならないのは、行動主義的地理学に対するハーヴェイの態度である。ノースウェスタン大学における行動主義地理学に関するシンポジウムにおけるハーヴェイの発言は、行動主義的アプローチに対して、おおむね否定的であり、しかもその根拠は、経済合理性以外のあいまいな行動原理を前提にしたのでは、立地論は成立しないという、科学の立場からすれば、全く倒錯したものであったが、記号論の理論的枠組を導入するならば、認

知行動にもとづく立地論を構築する可能性があると述べているのは興味深い。後に、マルクス主義の立場から都市分析をするようになったとき、ハーヴェイが、都市形態に関して、意味論的分析、あるいは形態をテキストとしてマルクス主義的に解釈する試み⁽¹⁴⁾をおこなっているのに通じる点、あるいはその萌芽が、そこに見出されるからである。

マルクスに対する言及に関してみるならば、パターソンも注目しているように、E・Gにおける三箇所⁽¹⁵⁾のそれは、いずれも短く二次的なものであり、弁証法との関連において、マルクスに言及するさいにも、ヘーゲルと並んでその名前をあげているのにすぎない。E・GのハーヴェイからS・J・Cのハーヴェイへの移行を説明するためには、E・G及びその他の著作において既にみられた新しい地理学に対する理論的懷疑や批判に注目するだけでは不十分であり、やはり、一九七〇年ラディカル科学運動のさかんであった合衆国のジョンズ・ホプキンス大学に移ったこと、そして、その頃から合衆国、カナダ、イギリスなどの地理学界において多様な観点からする地理学あるいは計量地理学に対する批判と反省とが

活発化したという外的要因にも注目しなければならぬ。

計量地理学に対する批判と反省は、(1) 新しい地理学における社会的レリヴァンシーの欠如、換言すれば、規範的観念と規範的陳述の欠如の結果としての現状維持主義的立場。この指摘は、恐らく、一九七一年のチサムの小論⁽¹⁶⁾及び同年のアメリカ地理学会におけるプリンスヤスマスの発言⁽¹⁷⁾に発していると言うことができよう。(2) 観念論または現象論の立場からの理論的批判⁽¹⁷⁾。これは一九七〇年の *Canadian Geographers* 紙上の一連の批判に発するもので、計量的・演繹的方法の地理学の狭隘性、一面性を批判したもので、一九七一年のゲルケの論文⁽¹⁹⁾では、ハーヴェイが、 Chollier、ハゲットとともに名指して批判され、彼らの地理学は、経験的検証に耐えうるようないかなる法則も構築していないと断じられたのであった。

このような一九七〇年代初頭の学界の状況下において、ハーヴェイは、(2)の立場からの批判に対しては、直接的には何ら反論せず、バルティモアの都市問題、あるいはアメリカ都市のゲットーやスラムの問題、すなわち、こ

これらのレリヴァントな問題に取り組みながら、D・M・スミスなどと同じ歩み、すなわち人種的・民族的差別、あるいは富の配分・再配分などにみられる空間的不平等・不公正を解決するための具体策を提言するための分析を進めていった。そのなかで、いくつかの、結果的には現状維持を主張することになる計量地理学の理論的定式の放棄、そして、厚生経済学に大きく依拠したいわば厚生地理学とでもいべきもの⁽¹⁹⁾の主張をすることになったのであった。後に、その大部分がS・J・Cの前半部分に収録されることになる一九七〇年から一九七二年はじめまでの一連の論文において、都市システムにおける実質所得の再配分を論じるさい、D・M・スミスの場合と同様、公共財の立地、外部効果、空間組織と政治的・社会的過程の関連が大きな問題になってきたのであった⁽²⁰⁾。

一九七二年頃から、英語圏諸国の地理学ラディカルは、いくつかの明確に異なった方向を示しはじめる。D・M・スミスなどは、基本的には新厚生経済学の枠内で、レリヴァンシーを強調しつつ、福祉の地理学を精緻化していく。一九五〇年後半からの計量地理学のバイオニアの一人であったブンゲは、大学教師の職を捨てて、タク

シーの運転手をしながら「デトロイトの地理学的探検」あるいは「革命の地理学」を実践するようになる。イギリスの多くの地理学者は、公共政策の立案、施行に行政面で参与する方向を強めることに、レリヴァンシーを見出そうとした⁽²¹⁾。このような中で、ハーヴェイは、ピートなどとともに、アカデミーにあって、創造的マルクス主義地理学をはっきりとうたうようになる。ピートが、広範なラディカルを包摂しようとするのに対して、ハーヴェイは、常に自己否定をくりかえしながら、その点で、たえず interim report を書きながら、そして、十年以上にわたって、先進工業化諸国の都市問題を常に出発点としてきたという点に、二人の地理学および地理学界に対する態度の違いを見出すことができるであろう。

(19) Radcliffe-Brown, A. R. *Structure and Function in Primitive Society*, Free Press, Glencoe, 1952

(20) Chorley, R. J. *Geomorphology and General Systems Theory*, Geological Survey Professional Paper, US Government Printing Office, Washington DC, 1962

(21) Berry, B. J. L. *Cities as Systems within Systems of Cities*, *Papers of the Regional Science Association*, 13, 1964

- (23) Harvey, D. Conceptual and Measurement Problems in the Cognitive-behavioral Approach to Location Theory, in Cox, R. K and R. G. Golledge (eds.) *Behavioral Problems in Geography: a Symposium*, Northwestern University Studies in Geography, 17, 1969
- (24) ハヴェイの『都市空間の政治的考察』 Harvey, D. Monument and Myth, *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 69, 1979 (『都市空間の政治的考察』ハヴェイ著、田代謙訳『東洋の地理学』——東洋の地理学——』東洋学叢書 一九八一年 二版)
- (25) Chisholm, M. Geography and the Question of "Relevance", *Area*, 3, 1971
- (26) Prince, H. Questions of Social Relevance, *Area*, 1971
- (27) Smith, D. M. Radical Geography——the Next Revolution? *Area*, 1971
- (28) ハヴェイの『都市空間の政治的考察』田代謙訳『東洋の地理学』——東洋の地理学——』『一橋大学』 一九八一年 二版
 大正一九二九年 二版を二巻に改題した。
- (29) Relph, E. An Inquiry into the Relations between Phenomenology and Geography, *Canadian Geographer*, Vol. 14, 1970
- Tuan, Yi-Fu, Geography, Phenomenology and the Study of Human Nature, *Canadian Geographer*, Vol. 15, 1971
- (30) Guelke, I. (1971) Problems of Scientific Explanation in Geography, *Canadian Geographer*, Vol. 15, 1971
- (31) ハヴェイの『都市空間の政治的考察』田代謙訳『東洋の地理学』——東洋の地理学——』第十八巻 第七号
 ハヴェイの『都市空間の政治的考察』の場所に発表されたが、その巻の一九八三年十一月 経済地理学会関西支部の例会発表の記録に採り上げられた。
- (32) Harvey, D. Social Processes and Spatial Form; an Analysis of the Conceptual Problems of Urban Planning, *Papers of the Regional Science Association*, 25, 1970. Social Processes, Spatial Form and the Redistribution of Real Income in an Urban System, in Chisholm, M. A. F. Frey and P. Haggett (eds) *Regional Forecasting: Proceedings of the Twenty-second Symposium of the Colson Research Society*, Butterworths, 1971. Social Justice and Spatial Systems, in Peet, R. (ed) *Geographical Perspective on American Poverty*, Antipode Monography in Social Geography, No.1, 1972
- (33) ハヴェイの『都市空間の政治的考察』田代謙訳『東洋の地理学』——東洋の地理学——』ハヴェイの『都市空間の政治的考察』田代謙訳『東洋の地理学』——東洋の地理学——』の巻頭に「ジョンストン、R. J. and S. Gregory The United Kingdom, Mikesell, M. W., North America, in Johnston, R. J. and P. Claval (eds.) *Geography since the Second World War: An International Survey*, Croom Helm, 1984

を参照することができる。

三

S・J・Cは、かつて筆者がその訳書の後書において指摘したように、ハーヴェイの「発展」又は「転向」の過程を記録した書物になっている。この点で、S・J・Cは、E・Gの場合と同様、著者の次の研究段階への展望を内に秘めた書物なのであるが、マルクス主義への移行そのものは、本書の後半部において、ハーヴェイ自身によって、エクスプリシットに表明されていることであって、この点では、E・Gの中においては、新しい方向が、萌芽的又はインプリシットに表明されていたのとは異なっている。あとでみるように、次の段階のハーヴェイとの関連で問題になるのは、ハーヴェイのマルクス主義そのものの中における新しい要素であろう。

一九七二年に、S・J・Cの第四章のもとになった論文⁽²²⁾を発売したときから、ハーヴェイの新しい展開に対して、いくつかの批判がなされた。アメリカ地理学のいわば正統となった計量地理学の立場からすれば、ハーヴェイは、ブングと同様、新古典派的枠組を放棄した逸脱で

あって、貴重な才能の浪費であり、またアロンソウ・ミューズ・ミルズ流の立地論が本来的に反革命的であるとするのは、何ら根拠がないものとされた。⁽²³⁾ペリーも、アカデミー地理学内部における偽善的研究を非難するという点では、ハーヴェイに賛成しつつも、ハーヴェイの議論は、マルクス主義理論の発展が自動的又は「魔術的」に社会変化をもたらすという「思い入れ」であると批判した。⁽²⁴⁾他方、新しい現象論的地理学の展開を志している人たちの立場からすれば、計量地理学者のハーヴェイも、マルクス主義者のハーヴェイも、人間を外面から非人格的な存在として捉えているという点で、実証主義の立場を貫ぬいているのであり、そこに一貫してある物質主義、還元主義及び決定論によって批判の対象になった。⁽²⁵⁾

S・J・Cに関する限り、これらの批判は、ある程度までは当たっている。合衆国の都市問題の分析が、本書の重要な主題の一つであったにもかかわらず、アメリカ都市の歴史的形成過程を、アメリカ資本主義の発展及び変貌の歴史的過程との関連で把握するという手続きを欠いたまま、マルクスの使用価値及び交換価値という概念が、都市空間に機械的に適用されている。そして、地代が都

市の土地を様々な利用に配分する役割を果たすという指摘をおこなってゲットーの形成を説明し、それは、利用が空間の価値を決定しているからなのではなく、価値が利用を決定しているからなのであると述べている。このような公式論と、マルクス及びエンゲルスの著作からの都市問題及び住宅問題に関する記述を断片的に引用してアメリカ都市問題の説明に適用している部分とは、理論的整合性を持っていないし、自己の説明理論を「革命的」と呼ぶ場合、ハーヴェイは、革命という言葉を明らかに混乱させて用いている。支配階級は、社会支配的観念を作り出すという『ドイツ・イデオロギー』の命題から出発するときには、革命とは知的活動による社会的実践を意味することになり、他方では、革命という言葉が、科学思想における革命の意味で用いられている。この二つの革命を、安易に結びつけて「地理学思想における真の革命の登場は、革命の実践に踏み出すことなしにありえない」と言うとき、彼によって、革命的理論を作り出したとされている、たとえば、ケインズやレッシュは、それぞれ彼らが生きた時代において、どのような革命的实践をなしたのであるかという疑問を抱かざるをえない

くなる。

S・J・Cは、たしかに、ハーヴェイが、極めて短期間に、マルクス及びマルクス主義の膨大な文献を読み、かつ、訓詁学的マルクス主義者からすれば、おかしな所がいくつもあるかもしれないが、これらのマルクス主義文献に驚くべき深い理解を持ったことを示した書物である。しかし、同時にわれわれは、本書におけるハーヴェイが、マルクス主義の立場を標榜しつつも、マルクス主義の諸概念に留保条件を付したり、あるいは、彼自身の自由な解釈を加えていることに注目しなければならぬ。このことは、彼自身は、マルクス主義の立場をより鮮明にしたと称し、又、バスターソンもそのように考えている第六章及び第七章について特に言えることである。

第六章の主題は、アーバンイズム urbanism であるが、この用語は、言うまでもなく、マルクスのものではなくアメリカのヒューマン・エコロジーに由来するものであって、しいて日本語に訳そうとすれば、「都市的生的様式」が、その用語の由来およびワイスの論文からみて適当であろう。ハーヴェイは、この都市的生活様式を、社会的過程であるとともに社会的形態でもあると規定して、

これとマルクスの概念である支配的生産様式との関係を考察している。そのさい、ハーヴェイは、多くの上部構造範疇に属する特徴をもつ都市的生活様式と社会経済組織との関係を精密に分析するためには、生産様式概念は、あまりに広義であり、また多義的でもあるので不適當であるとして、ポラヌイの系譜をひく経済人類学に由来する「経済的統合の様式」(mode of economic integration)の概念を用いている。すなわち互酬、再分配、市場交換という経済的統合の諸様式は、多様な支配的生産様式のもとにおいて存在しうるというのが、S・J・Cの第六章における彼の規定である。⁽²⁶⁾

このような理論的枠組みのなかで、都市的生活様式と剰余価値の空間的循環について考察して、まず、いくつかの命題が導き出される。たとえば、「都市は社会的に特定された剰余生産物の動員、搾取および地理的集中によって作り出された建築形態である。」「一定量の社会的に特定された剰余生産物の動員、搾取および集中は、ある(地理的)条件の下においては、他の条件の下におけるよりも容易である。これらの条件は、歴史的進化の過程の産物である。」「互酬に基づく経済的統合の様式から

再分配にもとづくそれへの移行にもなつて都市的生活様式が発生する可能性がある。」「経済的統合の市場交換様式の登場、およびそれにとまなう社会的階層分化と生産手段への接近度の差異の発生とともに、必然的に都市的生活様式が生じる。」などがそれである。これらの命題をふまえて、経済的統合の諸様式と都市的生活様式の空間経済を分析し、剰余の空間的循環の諸類型と都市的生活様式の諸類型との関係を考察し、たとえば、現代のメトロポリス(大都市)的生活様式において、市場交換を相殺する力としての再分配と互酬の役割を分析するのである。合衆国における都市再開発を、経済的機能の面からのみでなく、序列社会における威信財としてのシンの効果の面からも理解し、「市場交換が生活の全般に浸透しても、古くからの多くの経験に裏うちされた経済的統合の古い様式、再分配、互酬は、それらと結びついた社会的諸形態とともに、見捨てられるどころか適応して、新たな非常に重要な役割をになうようになった」とハーヴェイは断定する。現代の都市的生活様式のなかで、経済的統合の多様な様式が複雑に関連して、剰余価値を循環させ集中させていることを射程におさめるよう

な理論を構築すること、それは、諸刃の剣として、都市問題の告発、都市政策の提言という形で、科学者の社会的実践になるというのが、ここにおけるハーヴェイの新しい主張なのである。

パターソンが指摘するように、一九六〇年代と一九七〇年代を通じてのハーヴェイに、合理的分析への強い信仰、形態と過程との関係に対する関心、一般化への指向、さらには地理学という狭い学問分野の枠を越えた考察といった四つの点で一貫性・連続性があることはたしかである。パターソンは、同時に、農業から方法論に、そして都市理論へと研究対象が変化していることと、論理的事実主義からマルクス主義に哲学的立場が移行したこととの二点に、不連続性を見ているのであるが、S・J・Cにいたるまでのハーヴェイを、今ここで展開したような観点から見ると、彼の連続性と不連続性の構造はもっと複雑である。S・J・Cにおいて、マルクス主義の立場を、自ら標榜しても、それがE・Gの論理事実主義の立場を否定するものではないことは、多くの現象論的立場の地理学者が指摘する通りであろう。また、マルクスの英訳とともに、ハーヴェイが、アルチュセールや

ゴドリエの英訳⁽²⁷⁾を通じてマルクスに接近していったこと、すなわち構造的にマルクス主義者と同様の意味で「構造」というものを理解していた面のあることもたしかであるが、ハーヴェイのマルクス主義には、ダンカンとレイの構造主義的マルクス主義人文地理学の批判⁽²⁹⁾によって批判しつくされえない部分、すなわち、都市的生活様式という次元で、労働、資本、といったものを、その上部構造とともに人間のいとなみ、実践としてとらえなおそうとする側面⁽³⁰⁾、その意味では訓詁学的マルクス主義からの「逸脱」——それも、誤解や不勉強によるのではない意図的なそれ——があったことに注目しなければならぬ。この点にこそ、古い尾をひきずりながら、新しい萌芽を宿しているという、彼の著書全般に言える新しい萌芽の、S・J・Cにおける具体的なあらわれがあるのである。

地理学という分野に限定されないという点について言えば、パターソンの言うように、それは、ハーヴェイの一貫性とも考えられるが、E・GからS・J・Cの間には、その程度に質的な差異があって、S・J・Cは、もはや、地理学の読者だけを念頭において書かれたのでは

なく、彼の実践の産物なのであった。そして、この様な飛躍が、ならびに 'S・J・C' と 'L・C' の間に認められるのである。

- (22) Harvey, D. Revolutionary and Counter-revolutionary Theory in Geography and the Problem of Ghetto Formation, *Antipode*, Vol. 4, No. 2, 1972
- (23) Morrill, R. L. Socialism, Private Property, the Ghetto and Geographic Theory, *Antipode*, Vol. 5, No. 2, 1973
- (24) Berry, B. J. L., Revolutionary and Counter-revolutionary Theory in Geography—a Ghetto Commentary, *Antipode*, Vol. 4, No. 2, 1972
- (25) King, L. J. Alternatives to a Positive Economic Geography, in Gale, S. and Gunnar Olsson (eds.) *Philosophy in Geography*, D. Reidel, 1979
- (26) マルクス主義地理学の立場から、基礎的・社会的構造の交換の様式から、同様に「互酬」再分配、市場と分類としての「モーサー・ギョット」Morris, A. S. *Sociedad, economia y estructura geografica en Iberoamerica*, Geo-Critica 16, 1978 42 p.
- (27) Althusser, L. et E. Bardeur *Live "Le Capital"*, 1967 (権威、神戸大学『資本論を讀む』合同出版、一九七〇年) の英訳 *Reading Capital* 一九七〇年に出版された Godeler, M. Structure and Contradiction in *Capital*,

in Blackburn, R. (ed) *Ideology in Social Science*, 1972 (日本語訳はジャン・ブイヨン編 北沢高邦(他)訳『構造主義とは何か』みすず書房 一九六八年に収録されている) とともに 'S・J・C' の後半部としては参考文献としてあげられる。

- (28) Gregory, D. *Idology, Science and Human Geography*, Hutchinson, 1978, 198 p. のなかで「構造主義を『説明的な構造』、直接的経験の領域の外に置く研究の形態」(p. 76) と定義しているが、ハーヴェイ自身 'S・J・C' のなかで「構造は『事物』ではなく『行為』である。したがってわれわれは観察を通じて構造の存在を立証することはできない。諸要素を相関的に定義することは、直接的観察以外の方法で諸要素を説明することである。……観察可能な行為は「構造」、その意味が定められるのは、その行為の「それが部分をなす包括的な構造に対する関係を発見する」(S・J・C, p. 29. 日本語訳三八六頁) との「構造主義的立場を示している」。
- (29) Duncan, J. S. and D. Ley, *Structural Marxism and Human Geography*, *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 72, 1982
- (30) ハーヴェイの著書に Chouinard, V. and R. A. Fincher, Critique of "Structural Marxism and Human Geography", *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 73, 1983 を参照。

四

L・Cの序文によれば、S・J・Cを書きおえたのち、ハーヴェイは、マルクス主義の立場から、資本主義の下における都市過程の再定式化と、前著における不備や誤謬の訂正とに没頭した。結果としては、都市化のマルクス主義理論、あるいは建築空間における資本循環の理論を体系化するのに先立って、マルクス主義の基礎理論のいくつかの側面に、解明すべき空隙があまりに多いことを発見して、そのような基礎理論の諸側面の再検討に大部分をあてたL・Cが書かれることになったのである。

ハーヴェイはしかしながら、約十年をついやして、マルクスのテキストの訓詁学的吟味にふけていたのでは決してない。階層的な資本主義的住宅市場における階級的独占地代の発生、都市の政治経済学における金融的(32)上部構造の役割などに関する一連の研究は、いずれも地元(31)パルチモアに関する詳細な実証的研究のなかからうまれてきたものであった。これらの研究の各所においても、また、すでに検討したようにS・J・Cにおいても、

ハーヴェイは、上部構造の役割を重視しているが、これは、やがて、国家、イデオロギー、都市景観のもつ意味に関して、いくつかの独創的な論文に結実する。国家に(33)関しては、一九七六年の論文において、それを上部構造形態と考えるのは、理論的分析という目的からすれば適切であろうが、質本主義社会の歴史の研究においてはまったく不適切であったと明言して、国家が、社会から生じつつも、その上に君臨しつつ、自らを社会から疎外させ、同時に、法律、課税権などが、階級支配の手段としての役割をますます強めていく過程を分析している。イデオロギーとしての都市計画という考え方は、一九七八年の論文(34)においてもすでにみられたが、これは、科学、計画、あるいは都市景観などの知的営為の産物の「神秘のヴェールを剥がすこと(demystification)」を科学者の実践とみなす彼の立場(35)にも由来するものである。そして、このようなハーヴェイの「実践」の傑作は、パリにおける研究体験をふまえた一九七九年の論文(36)であろう。モンマルトルの丘にそびえるサクルハケールのパジリカが、異なった階級にとつて、それぞれ異なったものの象徴となっている、あるいは、異なったものを意味してい

ることが、パリにおける都市過程の分析から明らかにされる。とくに、階級闘争がそこにおいてもつ意味が、一八七〇年から一八七一年にいたる歴史が、一八七五年に最初の礎石がおかれ、一九一九年に完成したパズリカに、いかに内部化されていったかという観点からの分析から明らかにされている。コミューンの敗北と、国家と教会に對するその罪に對する聖なるモニュメントとしてのサクル・ケールに關するこの論文は、「この建物は、もの寂しい静けさのなかで、秘密をおおい隠している。この場所を『飾りたてる』ことに賛成あるいは反対して戦った人々の根本精神を理解した人だけが、そこに葬られている秘密を本当に掘りおこすことができ、そうすることによって、あの豊かな過去の経験を死んだような墓場の静けさから救いだし、当初の喧噪のゆりかごに変えることができるのである。すででの歴史は、窮極のところ、階級闘争の歴史である」という最後の文章を非常に説得的なものにする構成と内容とをもっている。

L・C・は、現代の資本主義の諸側面を、マルクス主義理論の分析枠組みでとらえなおすとき生じてくる基本的問題を論じながら、マルクスの理論とくに『資本論』

の限界とともに、社会体制としての資本主義の限界をも明らかにするという二重の性格をもつ書物である。これは、もう地理学の書物ではないと言うことも、たしかにできようが、「ハーヴェイの地理学」という観点から本書を見るならば、最後の二つの章、すなわち、第十二章「空間的形態の生産——資本と労働の地理的流動性」、第十三章「資本主義の空間経済の危機——帝国主義の弁証法」において、新しいマルクス主義の空間理論の体系的基礎を提示するために、S・J・C発表後約十年間苦闘した結果が、それに先行する十一の章であると見ることもできる。差額地代論をのぞいて——国際分業論においても問題になっているのは空間ではない——マルクスの理論において、さらには、従来のマルクス主義の理論において、空間および空間組織に對する関心が非常に欠如していたことを指摘しながら、空間組織は、蓄積と階級再生産の単なる反映でないと述べつつも、幾何学的空間パターンを基礎的であると考える空間フェティシズムを、ハーヴェイは、まず批判する。その点では、立地を人間活動の基本的物質的属性と見なしながらも、立地は社会的に生産されるという、一見、中庸の立場をハーヴェイ

はとる。しかし、中庸というのは、あくまで結果的なものであって、先行する諸章においても、ハーヴェイの空間的関心が常に背後にあることを、ここにいたるまでのハーヴェイに接して来た読者ならば、容易に発見することができるし、同時に、多くの点で地理学の限界を指摘している本書の最後の二章が、本質的には、ハーヴェイによるマルクス主義地理学理論の、はじめての体系的提示となつていることも明らかにするのである。ハーヴェイの著書の中に常にあった古い要素と新しい要素との弁証法的関係が、本書では、このような形であらわれていると見るべきであろう。

第十二章は、空間的統合が、空間における資本の循環によって達成されるのならば、まず資本と労働力の移動を分析しなければならぬという観点から設定されたものである。この章で、いくつか注目すべき点をあげれば、まず、「労働力移動の自由」の二重性——商品としての完全流動性と、労働力以外に売る商品を持たない人間の「移動の自由」がとりあげられ、人間としての労働力の移動が自由であるというのは、擬制的であるのみでなく、労働者に大きな犠牲を強いるものであり、この側面も分

析の射程に入れる理論を構築する必要が強調されている。次に、生産過程の立地が体系的に論じられているなかで、相対的剰余価値の源泉としての技術と立地との対立関係あるいは、立地の地理的および時間的慣性 (inertia) と資本の回転期間との関係などが、現代の資本主義を念頭に置いて論じられている。第三に、これは、S・J・C 以来の関心でもあったことであるが、資本の循環にあって、建築環境 (Built environment) の意義が、社会的インフラストラクチャーの領域性 (territoriality) との関係でも論じられているのが、極めて斬新な分析として注目される。

第十三章は、第十二章の理論的展開を基礎にしつつ、帝国主義と植民地主義を、地理的拡張と領域的支配というタームで再定義した上で、マルクスが不完全にしか解明しなかったか、まったく手をつけなかった——それは、当然のことながら彼が生きた時代の現実による制約または限界であった——分野を開拓しようとした部分である。第十二章のそれとならんで、本章の内容の検討は、筆者のマルクス主義地理学への展望との関連で、稿をあらためて論じることにしたいが、「地理的不均等発展」「資本

の循環における集中と分散」、「階級闘争の領域性とその空間的スケールの多様性」、「資本の階層的配置と国際化」など、S・J・Cにおいてはみられなかった地理学的概念が、E・Gとまったく異なった哲学的基礎の上に、本章で多く用いられていること、そして、前章で、労働力移動を、人間としての労働者の移動という側面からもとらえようとするヒューマニズム——批判的に評価すれば、行動主義的および記号論的アプローチの残存ということになるう——が、本章にもはっきりと出てゐること、以上の二点を、ここで指摘しておきたい。

自分と同年輩の他の研究者が、将来どのような方向に仕事を発展させるか、また、どのような仕事をすべきである、あるいは、してほしいなどということとを述べるほど、筆者は不遜でも、また卑屈でもないつもりである。ただ、彼の一地理学者としての軌跡は、それを跡付けるにたるだけの知的刺戟に満ちたものであり、L・Gにおける到達点は、仮に、それが著者が「あとがき」で述べているように、これもまた interim report であるとしても、徹底的に検討し、対決するにたるだけの、実に内容豊かな、そして強靱な体系をそなえたものなのである。

その検討とそれとの対決とは、もはや他人事ではないのであるから、「デヴィッド・ハーヴェイの地理学」というのとはちがったタイトルの下でなされなければならぬであらう。

(15) Harvey, D. Class-monopoly Rent, Finance Capital and the Urban Revolution, *Regional Studies*, Vol. 8, 1974. Class Structure in a Capitalist Society and the Theory of Residential Differentiation, in Peet, M., M. Chisholm and P. Haggett (eds.) *Processes in Physical and Human Geography*, Heinemann, 1975

(16) Harvey, D. The Political Economy of Urbanization in Advanced Capitalist Countries: the Case of the United States, in Gappert G. and H. M. Rose (eds.) *The Social Economy of Cities*, Sage Publications, 1975. Government Policies, Financial Institutions and Neighbourhood Change in U. S. Cities, in Deskins, D. R., G. Krish, J. D. Nystuen and G. Olsson (eds.) *Geographic Humanism, Analysis and Social Action: Proceedings of Symposia Celebrating a Half Century of Geography at Michigan*, Michigan Geographical Publications No. 17, University of Michigan, 1977

(17) Harvey, D. The Marxian Theory of the State, *Antipode*, Vol 8, 1976

- (45) Harvey, D. The Urban Process under Capitalism: a Framework for Analysis, *International Journal of Urban and Regional Research*, Vol. 2, 1978
- (46) ハーヴェイ, D. On Planning the Ideology of Planning, in Burchell, R. W. and G. Sternlieb (eds.) *Planning Theory in the 1980s: a Search for*

Future Directions, Center for Urban Policy Research, Rutgers University, 1978

この文獻を筆者は未読なので、インターンからの誘引をよみて、読みかきかへる。

(49) 前掲刊行参照。

(一橋大学教員)